ミツバチ科学 15(3)：97—98
Honeybee Science (1994)

ミツバチ科学研究所の15年
—玉川大学学術研究所への脱皮—

松香　光夫

15年にわたって親しまれてきたミツバチ科学研究所であるが，1994年4月1日から玉川大学の組織が一部改組されたのに伴い「玉川大学学術研究所ミツバチ科学研究施設」と名称が変更された．これを機会に15年を振り返り，現況を紹介することとしたい．

略年表の形式で流れをまとめてみた（表1）．

玉川学園創立50周年を記念して，昭和25年来岡田一次教授を中心に続けられてきたミツバチ研究の実績を生かしてミツバチ科学研究所が開設された．50周年記念行事の一環として年来の恩人でもあるカリフォルニア大学のミツバチ遺伝学の権威レイドロー博士を招聘できたことは幸いであった．研究所の事業としてミツバチ科学研究会と「ミツバチ科学」(年4回）の発行は翌年1月を期して動きだし，爾来毎年欠かさずに続いているのである．

国際会議などの機会に，関係者が中心になってミツバチ科学に関わるシンポジウムを主催することも多かった．日本で行われる会議では参加の研究者が，その前後に玉川大学を訪れ，討議や講演など，研究交流や教育実績をあげることができた．芳名録には著名な研究者が並んでいるが，中でも玉川大学で招待していただいたのは，上記レイドロー博士の他に，国際ミツバチ研究協会（IBRA，本部イギリス）のクレイン博士，ノーベル賞のフリッシュ博士の直弟子であるリンダウアー博士，その弟子である若手のキルヒナー博士をあげることができる．また特筆すべきものとして，1985年に名古屋で開催した第30回国際養蜂会議では，岡田一次事務総長，酒井哲夫プログラム委員長をはじめ，計8名の玉川大学関係者が実行委員として参画し，参加者2000名という大会議での得難い経験をしたことをあげておきたい．

また，IBRA に対しては，理事会の役員，地域幹事などを務め，その実績もあって東アジア図書分室を任されている．上記の国際養蜂会議を機に『養蜂用語辞典』を IBRA のシリーズ No. 9として刊行した．さらに，最近ではアジア養蜂研究協会の事務局を引き受けて，国際貢献に努めているところである．

海外への派遣は，ミツバチ科学研究所の責任でない部分も多いが，関係者の国際会議への参加や，長期出張による関連研究の実施もありがたかった．パラグアイ国との交流も特筆すべきであろう．研究所設立以前のことではあるが，

表1　ミツバチ科学研究所略年表

1979. 11	玉川大学学術教育研究所発足 ミツバチ科学研究所設置（岡田一次主任）
1980. 1	「ミツバチ科学」誌創刊（季刊誌） 第1回ミツバチ科学研究会
8	第16回国際昆虫学会議（京都）
10	H.H. Laidlaw 博士50周年記念行事に招待
11	吉田忠晴講師パラグアイ国養蜂指導（1978. 7–）より帰任
1981. 9	IBRA 東アジア図書分室開設
1984. 3	Eva Crane 博士 招聘
1985. 4	酒井哲夫主任
1985. 8–1986. 7	竹中哲夫助教授チュービンゲン大学派遣研究
10	第30回国際養蜂会議（名古屋）
1987. 8–1988. 9	吉田忠晴講師フランクフルト大学派遣研究
1989. 7	第5回国際無脊椎動物生殖学会議(名古屋)
1990. 7	M. Lindauer 博士学術教育研究所で招聘
12	アジア養蜂研究協会事務局設置
1992. 2	第1回アジア養蜂研究協会大会(バンコク)
6	W.H. Kirchner 博士共同研究に招聘
1993. 4	松香光夫主任
1994. 4	改組によりミツバチ科学研究施設となる
1994. 7	第2回アジア養蜂研究協会大会（ジョクジャカルタ）

JICA からの要請で竹内一男教授（当時講師），吉田忠晴助教授（同）が専門家として派遣され，同国の養蜂振興に寄与するところは多大であった．吉田助教授は帰任時にミツバチ科学研究所に配属され，その後，同国農業省からの研修員受入れも7名を数えている．

研究所の本務である研究の内容は，日本の地域的あるいは経済的特性を生かしたものに特色がある．ニホンミツバチはその名の通り日本在来種なので，アジア地域のものと，あるいはセイヨウミツバチとの比較に意味がある．世界に誇る日本の経済は，健康食品としてのミツバチ生産物の需要を高めており，ローヤルゼリーや花粉，最近ではプロポリスなどが世界的に抜群の消費量を示しており，これに伴って品質や特徴に関する研究や分析などが要求されている．

1970年代から継続しているミツバチ蜂児を利用したテントウムシ類の人工飼育はその方法自体に特許が認められるなど独自性が高い研究といえる．最近では天敵昆虫の利用が進められるようになって，農林水産省のプロジェクトにも参加させていただいている．

近年になって社会性昆虫が注目されるようになると，もちろんミツバチは主役を果しているが，仲間であるスズメバチ，マルハナバチの研究も関心を持たれることが多い．これらの昆虫の社会的分業，発熱性を利用した生活様式，匂いを中心とする情報化学物質の研究もまた興味深い現象として取り上げている．特にマルハナバチは，1990年から外国産の種を輸入してトマトの栽培に利用することが注目されるようになり，玉川大学では日本産マルハナバチの人工飼育技術を開発した．

人員構成についても紹介しておきたい．新しい研究施設員として辞令の交付を受けている教職員は兼任の主任である松香を含めて3人であるが，上記のような経緯をもつミツバチ科学研究施設であるので，ミツバチ科学に関する総合的な研究を行えるように，関連研究員という意味も含めて表2のような陣容を考えているところである．

表2　ミツバチ科学研究施設関連研究員　＊専任者

職	氏　名	専門分野
教授：	（主任）松香光夫	昆虫生理学，養蜂生産物
	片岡　勝美	食用作物学
	佐々木　正己	昆虫生理・生態学
	竹内　一男	養蜂学，ダニ学
	竹中　哲夫	食品製造化学
	田中　宏	園芸学
	戸田　博愛	食料経済学
	松山　惇	食品栄養学
助教授：	梅木　信一	植物学
	江澤　真	養蜂生産物
	新島　惠子	応用昆虫学
	古田　喬樹	応用微生物学
	＊吉田　忠晴	養蜂学
	脇　孝一	花粉媒介
講　師：	小野　正人	社会性ハチ類の行動学
	杉本　和永	花粉学，養蜂植物学
	＊中村　純	ミツバチ生理・生態学
	八並　一寿	食品加工化学

（〒194　町田市玉川学園6-1-1　玉川大学）

MATSUKA, MITSUO, Honeybee Science Research Center renamed. *Honeybee Science* (1994) 15 (3): 97–98. Honeybee Science Research Center, Tamagawa Univ., Machida-shi, Tokyo 194 Japan.

After 15 years' activity, the Institute of Honeybee Science was renamed as Honeybee Science Research Center, Tamagawa University Research Institute in April, 1994. Bee research in the university started in 1950, being directed by Prof. Okada, and the institute was established in 1979. Prof. Sakai was the second director and I am the third from 1993.

Main research topics are on comparative studies of honeybees with special reference to the Japanese honeybee, *Apis cerana japonica*; physiological ecology of social insects such as wasps and bumble bees as well as honeybees; honeybee products including honey, royal jelly, and propolis; rearing natural enemy insects with honeybee brood; and so on.

It publishes a quarterly journal "Honeybee Science" since 1980 in Japanese with English summaries for scientific articles. Post cards and other educational materials are also produced for public relations.

It plays roles as an East Asian branch library of International Bee Research Association (IBRA), and as a secretorial office for Asian Apicultural Association.